

## 衛生学者坪井次郎の経歴と業績

泉 彪之助

著者は『魯迅日記』に現れた日本人医師の経歴を調査中、魯迅令息の主治医であった坪井芳治が蘭学者坪井信道の曾孫であることを知り、その家系を検討した。<sup>(一)</sup>その過程で、芳治の父坪井次郎が、京都帝国大学の初代医科大学長、また京都大学医学部衛生学教室の創設者という輝かしい経歴にもかかわらず、早世したためその生涯があまり知られていないことに気付いた。著者は、坪井家研究の一環として坪井次郎の経歴と業績を調査したので、現在までに判明したところを報告したい。

調査の方法としては、次郎が東京大学医学部を卒業する二年前の明治十六年から死去翌年の明治三十七年まで、当時発行されていた関連ある医学雑誌を調査し、次郎の業績を収集すると共に、人事消息欄を検討して次郎の動静を知り、これに関連史料と比較した。またこのようにして作成した年譜を、研究の後期に発見した『京都医事衛生誌』所載の年譜と比較した。まだ次郎の業績全体を確定出来ていないが、業績の主な傾向は把握したと思われるので、その内容を記述する。

### 一、坪井次郎の家系<sup>(二)(三)</sup>

次郎は、文久二年七月五日、蘭学者芳洲坪井為春、その妻幾の次男として江戸芝浜松町で生まれた。

坪井芳洲は、幕末から明治初期における優れた医学教育者である。芳洲は旧名を大木忠益といい、出羽米沢藩の郷医大

木三智の子であった。郷医とは米沢藩独特の制度で、俸禄は受けませんが士分としての待遇を受ける医師である。大木家は、小松という宿場（現川西町）の駅医を勤めていた。

忠益は、藩医の堀内素堂に医学を学び、後に素堂の紹介で蘭学者坪井信道に入門した。このころ父三智は隠居して松翁を名乗り、忠益が家督を継いでいたが、坪井信道に入門するに際して父松翁も共に上京し、やがて忠益も家督を譲った。忠益は坪井信道の日習塾の塾監、後に塾頭を務め、坪井信道の死後は、坪井信良を助けて塾生の教育にあたった。嘉永五年忠益は芝浜松町で開業、坪井信道の次女幾と結婚した。

安政四年大木仲益（忠益より改名）は薩摩藩奥医師に任命されたが、それと共に坪井為春と改名し、芳洲と号した。安政五年藩主島津斉彬の臨終に侍した芳洲は、翌年江戸へ帰り、蕃書調所教授手伝を経て、文久元年西洋医学所教授に任命された。次郎が出生したのは、芳洲が西洋医学所教授に任命された翌年である。

しかし妻幾が長男俊太郎と共に病死したので、芳洲は村井柳子（やな）を後妻としてめとり、次郎はこの継母柳子に育てられた。芳洲と柳子の間には、三男謹三郎が生まれた。

芳洲は、維新後は新政府に採用され、鎮将府、医学所、大学東校、文部省編集寮などを経て、埼玉県立医学校長となり、同校廃校後は東京帝国大学御用掛となったが、明治十九年に死去した。

## 二、坪井次郎の受けた教育

次郎は、神田神保町にあった私塾訓蒙学社で学んだ後、明治八年外国語学校に入り、二年間ドイツ語を中心とする教育を受けた。この外国語学校はいわゆる旧外語で、大学南校の一部門の後身である独逸学教場、外務省の語学研修機関が文部省に移管された独魯清語学所、開成学校語学生徒の三つが合併して明治六年創設されたものである。<sup>(一四)</sup><sup>(一五)</sup> 明治七年同校の英語部門が独立して東京英語学校となり、明治十年四月これが東京開成学校普通科と共に東京大学予備門となった。もとも

と外国語学校は、「学制二編追加」に示された専門学校構想に従って設立されたが、<sup>(二四)</sup>明治五年の「外国教師ニテ教授スル中学教則」以来の、外国語による大学予備教育という性格も残していた。外国語学校のドイツ語教習生は、毎年数名が東京医学校予科へ進学し、また明治十年三月には、恐らく東京大学設立の準備として一三〇名の学生が移籍した。<sup>(二四)</sup>

医学教育における予科は西洋医学所の時代から存在し、東京大学医学部の前身、東京医学校では予科三年であった。これに明治十年三月、さらに二年の予備課程が置かれた。東京大学は明治十年四月十二日に創設されたが、その医学部では明治十一年三月にこれらを一括して五年の予科とした。<sup>(二四)(二六)</sup>この予科は、全国に中学校が普及していないため大学の予備教育課程として作られたもので、主としてドイツ語で教育が行われ、入学資格は「一四才以上二〇才以下、小学課程を卒業した以上のものたるべし」とされた。<sup>(二七)</sup>

次郎は明治十年三月東京大学予科に入り、予科三年と本科五年の課程を終えて明治十八年十月医学部を卒業した。国立公文書館所蔵の『東京大学医学部一覽』(表紙に明治十年と墨書されているが、正式な年度は明治十一年とすべきかと思われる)に、次郎の名が予科二等(予科の上から二年目)在学生名簿にある。<sup>(二七)</sup>次郎が入学したのは東京大学創立直前で、予科も三年の時代であったから、坪井次郎は東京大学医学部の最初の学生の一人として予科一年に入学したことになる。

明治十八年の東京大学医学部の卒業式は、十月三十一日(三十?)に行われ、次郎は後の京都帝国大学における同僚天谷千松(生理学)らと共に卒業証書を受けた。<sup>(二八)</sup>同年の他学部卒業生に、坪井九馬三の名が見られる。歴史学者坪井九馬三は、坪井信道の伯父の子孫である。

### 三、ドイツ留学まで

卒業に先立って次郎は衛生学教室に入り、明治十八年五月大学御用掛に任命され、准教授の称号を受けた。<sup>(二九)</sup>この准教授という地位の職務内容は不明である。卒業以前にこうした任命が行われたのは、当時は卒業試験合格認定と卒業式の間

時間があつたためであらう。<sup>(一〇)</sup>

その後、大学助手(衛生学教室勤務)を経て明治二十年十一月助教教授に任命された。次郎は東京大学医学部衛生学教室の最初の助手、つまり日本最初の衛生学の助手であつた。

我国における衛生学の講義は、医学部雇教師で生理学を担当していたチーゲル(Ernst Tiegel)が、明治十三年ごろ医学部で内務省衛生局員および陸軍省医務局員に行つたのが最初であつた。その後、片山国嘉が明治十五年から別課医学生に講義し、生理学の教授であつた大沢謙二が明治十七年ごろ生理学講義の一環として医学部学生に講義した。<sup>(一一)</sup>明治十八年一月、東京大学医学部に衛生学教室が開設され、マックス・フォン・ペッテンコーフェルの元に留学した緒方正規が、同年二月最初の衛生学の教授となつた。<sup>(一二)(一四)</sup>ヨーロッパ最初のミュンヘン大学衛生学教室開設後、二〇年目のことである。緒方は、教室開設のころを回想して「最初ニ設置セラレタル衛生学教室ハ僅カニ余等ノ寄宿シタル旧医学部学生ノ寄宿舎ノ三室ヲ以テコレニ充テ職員トシテハ余ノ外一名ノ小使アルニ止マリ助手モ数月ノ後ニ至リテ任命セラレ」と述べているが、<sup>(一三)</sup>この助手が坪井次郎である。明治二十一年五月、大日本私立衛生会總會の際、衛生学教室を公開して參觀に供したが、説明にあつたのは緒方教授、坪井助教、富岡(美矢太)助手らであつた。<sup>(一五)</sup>

助手、助教として衛生学教室に在籍中、次郎は別課医学生の衛生学講義担当、東京医術開業試験委員、私立済生学舎生理学講師、海軍軍医学校教授、国家医学講習科講師、第三回内国勸業博覧会審査官など多くの職務を行っている。また後に述べるように明治二十三年八月、足尾銅山へ衛生学上取り調べのため出張した。

このうち、海軍軍医学校は慈恵医学校が同校を兼ねており、基礎医学は東京大学から講師を迎えたものという。<sup>(一六)</sup>国家医学講習科は、明治二十二年十二月十七日、帝国大学に設置された。

明治二十三年四月二日、次郎が第一回日本医学会で「家屋衛生」の演題で講演を行ったのは、日本の衛生学者が公開の講演を行った最初とされる。<sup>(一七)</sup>第一回日本医学会は、明治二十三年四月一日から四月七日の間、厚生館(京橋区木挽町)、帝

国大学講義室（神田一ツ橋外）を会場として開催された。次郎の講演は、医学会二日目の第一会場で行われた発表で、次郎が第一席であり、座長（幹事長）は長与専齋であった。この講演で次郎は、家屋衛生の要件として採光法、温暖法、換気法、汚物排除法を上げ、日本家屋の価値を衛生的に検討し、その価値を肯定しながらも汚物排除などに改善の余地があるとしてゐる。<sup>(三二九)</sup>

またこの留学前の期間、次郎は多くの論文、論説を執筆し、衛生学本来の研究とヨーロッパ医学の紹介につとめた。

#### 四、ドイツ留学

明治二十三年（一八九〇）九月十四日、坪井次郎は横浜を出帆するフランス船サガレン号に乗船して、ドイツ留学に旅立<sup>(三三〇)</sup>った。同じ船に、帝国大学総長として次郎の上司であった渡辺洪基が特命全権公使として赴任するため乗船していたが、渡辺は父芳洲の西洋医学所時代の学生であった<sup>(三三二)</sup>。十一月二日ミュンヘンに到着した次郎は、翌日からルートウィヒ・マキシミリアン大学（ミュンヘン大学）衛生学教室における留学を開始した<sup>(三三四)</sup>。教室の主宰者はマックス・フォン・ペッテンコーフェル、共同研究者は助教教授ルドルフ・エンメリッヒであった。ミュンヘン大学衛生学教室は、一八六五年にペッテンコーフェルによってヨーロッパで最初に開設された衛生学教室で、この年バイエルンではミュンヘン、ビュルツブルク、エルランゲンの三つの大学で衛生学教授の席が設けられた<sup>(三三四)</sup>。留学中、次郎は生理学者フォイトにも師事し、また原虫学（指導者ヘルトウィッヒ）、化学（指導者バイエル）（Adolf von Beeyer）、国家経済学（指導者ブレンターノ）（*Adolf von Lujjo Brentano*）<sup>(三三四)</sup>をも学んだ。明治二十五年三月末文部省調の海外留学生表には、上田万年と並んで次郎の名が見られる<sup>(三三三)</sup>。当時バイエルン王国は、ルートウィヒ二世の不慮の死後、一八八六年に王位を継承したオットー一世と、その摂政ルートポルト公の治下にあつた<sup>(三三五)</sup>。

マックス・フォン・ペッテンコーフェルは、一八一八年十二月十八日、ミュンヘンの北、ドナウ河畔の Neuburg に近

い Lichtenheim という小村に生まれ、自然科学、薬学、医学を学び、最初化学の領域で業績を上げた。一八四七年ミュンヘン大学医化学教授に就任、その後衛生学に関心をもち、経験的な基礎の上にあった衛生学に科学的根拠を与えることに努め、実験衛生学の祖となった。若い時俳優としての生活を送ったり詩作を好むなど、人間的な魅力にあふれた人柄であったらしく、緒方正規、鷗外森林太郎、小池正直、中浜東一郎ら多くの日本人留学生がペッテンコーフェルのもとで学んだ。<sup>(三六〇)</sup>

ルドルフ・エンメリッヒ(一八五二—一九一四)は、ペッテンコーフェルの教室で第二番目に助手となった人で、最初は私講師であった。<sup>(三六〇)</sup> エンメリッヒは、ペッテンコーフェル研究室の細菌学的研究を担当した。<sup>(四二)</sup>

明治二十四年(一八九二)一月、次郎は政府からローベルト・コッホの結核治療法講習を受けることを指示されたが、当時コッホはエジプト旅行中であった。同年二月再度出張の指令を受け、三月三十日ベルリンを訪れてコッホに会い、四月一日から一カ月間モアビット病院で研修を受けた。<sup>(四二)</sup> このモアビット病院は、恐らく鷗外森林太郎の『ドイツ日記』にある「モアビットなる市病院」と同じで、<sup>(四三)</sup>ベルリンのモアビット地区あるいはモアビット街にある市立病院を指すものと思われる。エンメリッヒも『ドイツ日記』に現れる。

この講習は、有名なコッホのツベルクリン療法で、コッホは結核菌の発見後まもなくツベルクリンを創製したが、一八九〇年ベルリンで行われた万国医学会でツベルクリンが結核に対して治療効果を持つと発表し、大きな反響を巻き起こした。<sup>(四四)</sup> 次郎の受けた指示はその現れである。しかしこの療法の価値は、その後否定された。

次郎のミュンヘン滞在中、明治二十五年(一八九二)十月にペッテンコーフェルの有名なコレラ菌飲用実験が行われた。ペッテンコーフェルはこの実験について、同年十一月十二日にミュンヘン医学会で講演を行うが、<sup>(四五)</sup>次郎はこの講演を聴講した三人の日本人(帝国大学助教坪井次郎、陸軍二等軍医大西秀治、ドレスラウ医科大学助手松本鷗)<sup>(四七)</sup>の一人であった。松本鷗は松本良順の子息である。講演を終わったペッテンコーフェルは、懇切に三人の日本人聴講者に挨拶したという。

次郎は熱心な研究のかたわら、政府、帝国大学、大日本私立衛生会などの代表として、第七回万国衛生およびデモグラフィック会議（ロンドン、一八九一年八月）、第十一回万国医学会（ローマ、一八九四年三月）、第八回万国衛生およびデモグラフィック会議（ブダペスト、一八九四年九月）に出席するなど、活発な活動を続けた。

明治二十六年（一八九三）次郎はバーデン政府の招きでカルスルーエに出張、豚丹毒予防接種の指導を行った。<sup>(四八)</sup>また同年、Arch. f. Hygiene のベッテンコーフェル学位取得五〇年記念号に、次郎はただ一人の日本人執筆者として論文を発表した。<sup>(四九)</sup>先に述べた第八回万国衛生会では、次郎は政府委員として出席し、微生物学部の名誉会頭に推され、閉会式では日本会員を代表して謝辞を述べた。<sup>(四八)</sup>

留学期間中明治二十六年八月に三年間の留学期間が切れ、さらに一年の延期は承認されたが、休職の身分となった。助教で留学に出発した次郎が、帰国後講師を嘱託されているのは、この休職処分のためである。

明治二十七年十一月十四日、四年間のドイツ留学を終えた坪井次郎はミュンヘンを出発、スイス、イタリイを経て、ジエノバからドイツ船ゲーラ号に乗船し、十二月三十日横浜に到着した。<sup>(四八)</sup>

次郎は留学途中、文部省に提出した報告書の中で、研究課題として五件を上げている。<sup>(五〇)</sup>

一、ミュンヘン府二三家屋の天然換気法に関する研究 坪井次郎実験

一、血清の殺菌力是一種の生理的現象なるか又は純然たる化学的作用なるか論ず 坪井次郎、エンメリッヒ実験

一、血清の殺菌力の増進及回復論 担当者 同上

一、亜細亜虎列刺は虎列刺「バチルレン」に因り産出せられたる亜硝酸塩中毒なるの説 担当者 同上

一、家猪の丹毒不感性に関する試験 エンメリッヒ研究、坪井次郎補助

また帰朝時の雑誌記事によれば、<sup>(四八)</sup>留学中の研究テーマは、

○血液の予防及治療物質の本性に就て

○家猪丹毒病予防及治療法

○血液の殺菌作用は生活機能に帰す可きや將た純粹化学的作用なりや

○血液殺菌力の還元法及増進法

○虎列刺の亜硝酸中毒説

○丹毒血清を以てする脾脱疽、癌腫、肉腫、梅毒等の治療法

(以下は生理学教室における研究)

○食物と身体の水分及血球素の關係

○純粹ペプトンの栄養価

○無窒素食物を以てする腸管内窒素の排泄に就てであつた。

これらのテーマを見ると、本来の衛生学よりも細菌学の比重が大きいような印象を受ける。これは、ペッテンコーフェルの教室で細菌学研究を担当していたエンメリッヒを、直接の指導者としたためであろう。

留学中、次郎が講義を聴講した国家経済学の教授ブレントナーは、Lujo Brentano であると思われる。経済学者 Lujo

Brentano は、新歴史学派左派に属する経済学者で、一八九一年から一九一四年までミュンヘン大学で教鞭を取つた。国

家経済学(あるいは国民経済)という表現そのものが歴史学派を思わせる。ペッテンコーフェルは、衛生学と国家経済学が

類似しているとの持論であつたが、<sup>(三六)</sup>歴史学派の社会政策重視の姿勢がこのような考えを持たせたのかも知れない。Lujo

Brentano は、労働保険、工場法による労働者の保護を主張したが、<sup>(五一)</sup>坪井次郎は産業衛生の関連領域としてこのような内

容を学ぼうとしたのであろうか。



## 五、帰国後、京都帝国大学医科大學建築設計委員となるまで

ドイツ留学から帰国した坪井次郎は、医科大学講師を嘱託された後、明治二十八年四月に助教に復帰した。また明治二十八年十一月、医学博士の学位を受けた。<sup>(五四)</sup>

次郎を待っていたのは、新進の衛生学者としての社会活動であった。内国勸業博覧会審査委員、水産博覧会審査官、臨時陸軍検疫会議商議員、済生学舎非常勤講師（細菌学）、大日本私立衛生会事務講習所講習講師、国家医学講習講師、済生学舎顕微鏡実地演習科講師、東京顕微鏡院講習講師などの諸任務を受けている。

このうち、臨時陸軍検疫会議は日清戦争帰国将兵の検疫のために設置されたものである。日清戦争は、戦没者の九割が戦病死者という特異な状況で、伝染病では、赤痢、マラリア、コレラの多数の患者を生じた。<sup>(五五)</sup>コレラの害をもっとも強く受けたのは澎湖島攻略部隊で、総兵力五、五〇〇人中死者一、一〇〇名（または七〇〇名）といわれる。<sup>(五五)(五六)</sup>戦争末期、遼東半島でコレラが発生し、兵士の中にも患者が増えたため、陸軍省は帰還将兵に対して検疫を行うこととし、明治二十八年四月二十六日、「臨時陸軍検疫部検疫規則」を定め、その第二章でこの会議の設置が規定された。<sup>(五五)(五七)</sup>次郎は、この職務のために似島（広島県）、彦島（山口県）、桜島（大阪府）の各臨時陸軍検疫所へ視察に出張し、また従軍記章を授与された。

この経験を評価されたものであろうか、後に明治三十一年台湾でペストの流行があった時、次郎は出張を命じられ、二月カ月台湾に滞在した。<sup>(五八)</sup>

大日本私立衛生会は、明治初期に起こった伝染病とくにコレラの蔓延に象徴される不良な衛生状態に対して、行政組織が充分に対応出来ず、一方民衆の側でも知識・教育の不足が大きな混乱を巻き起こしたために、長与専斎らが主唱して作った半官的組織である。<sup>(五九)</sup>大日本私立衛生会は後に血清製造などの事業も行うが、地方衛生会の設立、講演会の開催など啓蒙、教育活動に努めた。次郎はその一翼を担い、上の講習以外にも地方衛生会への出張や教育講演などを行っている。

東京顕微鏡院は、緒方正規のもとで学んだ遠山椿吉によって明治二十四年東京市に設立され、臨床検査業務を行うと共に、細菌学講習会を開催した。<sup>(二四)(四四)</sup> 遠山椿吉は次郎の死去後、遺族の依頼で次郎の訳書『衛生綱領』を改訂増補し、明治四十四年『近世衛生学』として出版している。<sup>(六〇)</sup> 当時遠山は、東京市衛生試験所長であった。

一方、次郎は学会でも多くの職務を受け、東京医学会議員および常議員、国家医学会幹事および評議員、大日本私立衛生会評議員などに選ばれた。明治三十年二月九日の医科大学教授榊俣の葬儀では、次郎が学士会代表として祭文を朗読した。

注目すべきは、坪井次郎が足尾銅山鉍毒調査委員（第一次委員会）に選ばれたことであるが、この点については別記する。

## 六、足尾銅山鉍毒事件と坪井次郎<sup>(六)(六六)</sup>

ドイツ留学に先立って次郎は、明治二十三年足尾銅山の衛生学的調査を命じられ、二週間出張した。足尾銅山では早くから公害問題が起こり、住民の不満がつついていた。この年八月二十三日に、足尾では渡良瀬川の大洪水が起こっているが、次郎が出張の命令を受けたのは七月三十日で、八月十日に出発し、洪水が起こった翌日の二十四日に帰京している。この調査の結果について、次郎は文章を残していない。

しかしこのころ、鉍毒の存在について科学的調査を望む声が起こった。明治二十三年八月、栃木県安蘇郡植野村有志は洪水の泥土分析を栃木県立病院に依頼、同二十四年五月栃木県足利郡吾妻村、毛野村有志は足尾銅山の調査と土壌分析を農科大学に依頼、同年六、七月群馬県、栃木県は帝国大学農科大学と農商務省へ耕地被害の原因調査と除外法研究を依頼、農科大学では助教古在由直と同長岡宗好に、農商務省では技手見習坂野初太郎に担当させた。<sup>(六一)</sup>

鉍毒の被害がなお続いたこと、古在と長岡の報告が鉍毒の害を認めるものであったこと、明治二十四年から鉍毒問題を

糾弾する田中正造の活動が始まったことよって、政府は対応を迫られた。

留学から帰国後、明治三十年三月二十六日次郎は足尾銅山鉍毒調査委員（いわゆる第一次委員会）を命じられた。同年二月田中正造は帝国議会で鉍毒問題についての質問書を提出し、三月十八日、政府はこれに対する答弁を行ったが、田中は再質問書を提出、説明演説をした。この演説の日、最初の八人の委員が任命されたのである。この時任命されたのは、三月二十四日、委員長神鞭知常、古市公威、後藤新平（内務省衛生局長）、目賀田種太郎、早川鉄治、坂野初太郎、細井岩弥、和田国次郎、小寺房次郎、二日後の三月二十六日、小藤文次郎、渡辺渡、坪井次郎、織田一、長岡宗好、肥塚龍、入沢達吉（医科大学助教授）の十五名で、医師は後藤、坪井、入沢の三名であつた。<sup>(六一)</sup>

次郎はこの調査結果について二編の論文を発表しており、鉍毒の人体に対する影響については否定的見解を述べた。<sup>(六三)</sup> ため、次郎が始めから政府側に立った見解の持主であるかのような論述がある。鹿野政直らの「足尾鉍毒事件研究」では、次郎が論文で「高等動物及ヒ人」と書いて、人を動物と同一視しているように批判しているが、次郎の論文は、足尾および東京での住民検診成績と動物実験の結果とからなっており、上記の考察は両方の部を総括した結論部分で、先入観の所産ではない。

同じような、鉍毒の人体に対する影響を否定する見解は、川俣事件（足尾鉍毒抗議行動が刑事事件とされたもの）控訴審で証人となった宮入慶之助、三宅秀、入沢達吉が述べている。<sup>(六二)</sup> 入沢は坪井次郎と共に足尾を調査しており、その見解は坪井次郎の実験結果も反映していると考えてよいであろう。

著者には次郎の実験成績を十分に批判する知識がないが、鉍毒の原因物質として銅のみに注目し、動物実験も純粋な銅溶液で行ったのは、上の証言について森長英三郎氏が指摘するように、あまりに単純化しすぎた実験モデルといえるのではないだろうか。第二次調査委員に選ばれた児玉豊治郎は、調査のはるか後になって、足尾で自分が呼吸器粘膜をおかさしたことを思い出し、亜硫酸ガスの発生があつたのではないかと気付き、銅の影響を中心とした自分の調査が不十分では

なかつたかと反省している。<sup>(六四)</sup> 当時は複合汚染という概念がなく、森長氏がいうようにこれが当時の医学的限界であったかも知れない。<sup>(六二)</sup> 現地の住民検診では、調査した委員は十二指腸虫の寄生の多さに印象づけられたと見え、しばしばそのことが書かれている。

明治三十年十一月二十七日、次郎らは同委員を免じられた。明治二十九年十二月以降政府から出された予防工事命令に対する作業が、明治三十年十一月二十二日に竣工認可を得たためである。<sup>(六六)</sup>

しかし足尾鉍毒問題はなお解決せず、田中正造の活躍があり、たびたび民衆の抗議行動を引き起こす一方、政府は明治三十五年三月、第二次足尾銅山鉍毒調査会を発足させることになった。

## 七、京都帝国大学医科大学長として

坪井次郎は、明治三十一年四月、猪子止戈之助（京都府立医学校長）、三宅秀（元東京帝国大学医科大学長）、久留正直（文部技師）と共に京都帝国大学医科大学建築設計委員を命じられた。<sup>(六五)―(六九)</sup>

京都帝国大学は、日清戦争後の明治二十八年に設置が計画され、法科、医科、文科、理工科の四分科大学からなる案が作られた。このための予算案は明治二十八年十二月の帝国議会に提出され、明治二十九年三月予算案通過、明治三十年六月二十二日に設置の勅令二一九号が公布された。<sup>(六五)</sup>

医科大学は、理工科大学の設置に二年遅れて開学され、明治三十二年七月三日医科大学講座とその数決定、七月六日坪井次郎が京都帝国大学教授および医科大学長に補せられた。医学科の開講は九月である。『京都帝国大学史』によれば、坪井次郎が医科大学長となるのが、予算案通過ごろすでに文部省内で内定していたといわれる。<sup>(六五)</sup> しかしこのことは一般には知られず、『京都医事衛生誌』は、医科大学長候補者として猪子止戈之助の名をあげている。<sup>(七〇)</sup>

衛生学講座は次郎が教授として開設され、東京帝国大学医科大学助手の辻谷幾藏と柿沢信義が助手に任命され、後に柿

沢が助教教授となつた。<sup>(二一)</sup> 地位は不明だが、論文には次郎の共同研究者として布留幾作の名がある。

衛生学教室の当時の業績は充分明らかに出来なかつたが、確認出来た論文は六編、内原著論文とすべきもの二編で、その内容は衛生学に関するもの、細菌学に関するもの各一編である。また坪井次郎は、ペッテンコーフェルに関するものを除いて十二回講演を行った。古い版の医学雑誌総合目録には『京都帝国大学衛生学教室業績集 明治三十三年』の名があるが、<sup>(七二)</sup> 現在では失われているという。<sup>(七三)</sup>

明治三十三年一月の『京都帝国大学一覽』の「医科大学」学科課程によれば、学生に対する衛生学の教育は、第三学年の秋期、毎週二時間行われている。<sup>(六七)</sup>

新設の医科大学長として次郎は多忙な日々を過ごすと共に、京都医学会会頭、京都衛生検査所顧問など多くの社会的責務を果した。塵芥焼却炉の視察、牛乳消毒所の設計や、全国菓子品評会の審査長まで勤めている。<sup>(七三)</sup>

明治三十三年一月、衛生学教室を会場として次郎が行つたペスト講習は、後に著書として刊行されただけでなく、講習を受けた者が次郎に記念品を贈って謝意を表したほど、好評を博した。<sup>(七四)(七五)</sup> このころ大阪を中心に厦門から輸入されたペストの流行が起り、<sup>(四四)</sup> 医師を含む多くの死者を出した。この講習は、京都府衛生会の依頼でその対策として行われたもので、京都ではペストは流行せずに終わった。

京都衛生検査所は京都医事会の設立によって明治三十四年五月開所し、同じ年、次郎が微菌学、衛生学の講習を行った。同所は、このような講習を行う一方、喀痰、ジフテリー偽膜、血液などの臨床検査を担当した。同所の微菌検査主任は鷹取常任で、顧問が次郎であつた。<sup>(七六)</sup>

明治三十三年十月、次郎は大学院生宮島幹之助の病原虫研究指導を命じられるが、宮島は父芳洲の縁戚で、米沢の出身であつた。<sup>(七)</sup>

京都帝国大学医科大学助手木原岩太郎は、帰国後耳鼻科の教授に就任する予定でドイツ留学を命じられたが、渡欧の船

中で発病しベルリンで死去した。<sup>(七七)</sup> 明治三十三年十二月二十八日、遺骨の帰還を待つて小石川伝通院で行われた追悼会に、次郎は上京して出席している。

ペッテンコーフェルは妻と子を失うなどの不幸に見舞われ、明治三十四年（一九〇二）二月十日ピストル自殺を遂げた。多くの弟子がいる日本では方々で追悼の催しが行われたが、京都では祇園神幸道東山文庫で追悼会が行われ、次郎は涙を浮かべながら追悼の演説を行った。<sup>(七八)(七九)</sup> 追悼会には次郎が持ち帰ったペッテンコーフェルの揮毫が掲げられ、遺影の前で「プロジェクト、ヘル、ゲハイムラート」と次郎がビールの杯をあげた。次郎のペッテンコーフェルについての講演は、『京都医事衛生誌』に掲載された、上の追悼会のものが知られているが、次郎は明治三十四年六月九日に行われた京都府衛生会第三回総会でもペッテンコーフェルについて述べており、その要約が同会発行の『公衆衛生』誌に掲載されている。<sup>(八〇)(八一)</sup>

明治三十六年初夏、次郎は感冒にかかり、持病の関節リウマチから心内膜炎を起こした。七月七日大病院に入院して笠原教授の治療を受けたが、大動脈弁狭窄を来し、危篤となり、七月十一日退院して自宅へ帰り、七月十三日午前十一時、京都市西洞院通り丸太町上るの自宅で死去した。享年四十一であった。<sup>(八二)</sup> なお『京都府立 医学校校友会雑誌』、『衛生談話』誌は、次郎の死因を「感冒から急性肺炎を併発して死去した」としており、<sup>(八一)</sup> このように伝えられた面もあったのである。

七月十九日相国寺心華院で盛大な葬儀が行われ、同寺に葬られた。法名は、帰真院杏林濟世（生？）智仁居士である。<sup>(八三)</sup> 京都日出新聞に掲載された次郎の死亡広告には、喪主として坪井芳治、親戚として谷敬三、足立寛、坪井正五郎、坪井九馬三、有賀長雄の名が出ている。

坪井次郎の墓は現在、京都市高台寺にある。<sup>(八四)</sup> 『京都市医師会五十年史』に引用された「京都医家とその墳墓」では、坪井次郎の墓所は相国寺となっているので、<sup>(八五)</sup> いつの時から移葬されたものであろう。心華院という塔頭は現在相国寺にはなく、別の文献は次郎の墓所を相国寺大光明寺としている。<sup>(五四)</sup>

死去の前日に次郎は正五位に叙せられ、勲五等瑞宝章を贈られた。<sup>(一一)</sup> 葬儀の際、緒方正規は東京帝国大学総代として、宮島幹之助は伝染病研究所総代として列席し、弔辞を捧げた。<sup>(八三)</sup>

同年七月二十四日荒木寅三郎が後任の医科大学長に、同年十月二十二日松下禎二が後任の衛生学教授に、それぞれ任命された。<sup>(六五)(六八)</sup>

## 八、坪井次郎の家族

次郎は、明治二十三年三月十八日大阪市の有賀長憐の五女、国子（戸籍名くに）と結婚した。<sup>(八六)</sup> 国子は明治六年生まれで、その長兄は法学者有賀長雄、次兄は後の三井合名理事有賀長文である。

次郎は有賀長文と親しかったように思われるので、ここでは長文の経歴を記す。慶応元年大阪市に出生、明治二十二年東京帝国大学法科大学政治学科を卒業、貴族院書記官、農商務省参事官、同省局長等を歴任、明治三十一年退官し、後三井家に迎えられて同族会理事となった。<sup>(八七)</sup> 国子が結婚したころは、有賀長文が貴族院書記官の時代でないかと思われる。

次郎と国子の間には、政子、芳治、信子（戸籍名信）、末弟（夭折、著者には氏名未詳）の四人の子女があり、<sup>(八八)</sup> 芳治は正十三年京都帝国大学医学部を卒業して慶応大学小児科学教室に学び、中国の上海にわたって篠崎医院に就職、そこで文豪魯迅の令息の主治医を勤めた。坪井芳治については、芳治の女婿齋藤祥男教授の著書と著者の論文がある<sup>(九〇)(九一)</sup>ので、詳細は省略する。

政子は養子を取って家を継いだ<sup>(九〇)</sup>が、現在その跡は絶えているという。<sup>(九〇)</sup>  
信子は陶芸家河合栄之助に嫁いだ。<sup>(九〇)</sup>

次郎の妻国子は、昭和三十二年一月十二日に京都で死去した。<sup>(九〇)</sup>

## 九、坪井次郎の業績

まだ坪井次郎の全部の業績を集計出来ていないが、現在までに判明したところでは、次郎の業績は、著書・訳書一〇編、欧文論文三編、邦文の原著、短報、調査報告、綜説（以下論文と記載）約六〇編（内、欧文論文の邦訳されたもの七編）、雑報、紹介、翻訳、抄訳などの諸種著述（以下紹介論文と記載）約六〇編、学会発表、講演、公開講義約七〇回である。これらのうち、初期の著述では原著論文と紹介論文との区別が明らかでないものもある。

著書・訳書は、衛生学に関するもの四編、細菌学に関するもの二編、生理学に関するもの三編、衛生学に関する訳書一編である（表1）。国立国会図書館には次郎の著訳書九編が所蔵されているが、『普通衛生学』（上）（島村利助ほか刊）（刊行年不明）という広告があり、国会図書館に所蔵されている『普通衛生学』（普通衛生雑誌社、明治二十四年八月、頁数九六頁）とは別と思われる。この他に、父芳洲の著述を次郎が出版したものがあ<sup>(八九)(九〇)</sup>る。

欧文論文のうち、一編は先に述べたペッテンコーフェル記念号の論文、他の二編はエンメリッヒを筆頭執筆者とする共著論文である。邦訳された論文はすべてエンメリッヒ・坪井の共著論文だが、調査中に原論文を記録しなかったので、欧文論文との異同は明らかでない。

邦文論文中、約半数が純粋に衛生学的なもので、生理学その他についての少数を除くと、後は細菌学、血清学などに関する論文である。

学会発表のうち、国際学会は二回（ロンドン、ブダペスト）、ただしブダペストのは内務省衛生試験所長田原良純の論文の代読であった。ロンドンでは、エンメリッヒの主張する「コレラの亜硝酸中毒説」を述べた。他に、エンメリッヒを筆頭者とするドイツ内科学会での発表一回がある。

また次郎のドイツ留学前の学会発表・講演を見ると、二〇回のうち、内容未詳、分類不明の四回を除き、一三編が衛生



学に関するもの、三編が細菌学に関するものである(表2)。比較のため、京都帝国大学時代の講演と並べて掲げた(表3)。

興味深いのは、次郎の初期の著述の中に、ヨーロッパ医学の現況を紹介するものが極めて多いことで、このことは次郎の業績の一つの特色を示すものであろう。これは次郎に限らず、当時の新進医学者が一般に課せられた任務であったかも知れず、また大学卒業後まもなく父を失った次郎の経済的事情によるものかも知れない。

緒方正規は弔辞の中で、次郎の業績を次のように上げている。<sup>(二九)</sup>

- 一、地中炭酸ノ説付粧室実験
- 一、東京大学寄宿舎換気ノ実験
- 一、釀母之説
  - 一、麴之説
  - 一、味噌ノ含窒物
- 一、食物調査ノ成績
  - 一、味噌ノ含窒物
- 一、生鯉節中「プトマイン」ノ実験
- 一、東京帝国大学下水実験成績
  - 一、破傷風ノ説
  - 一、うばゆり之説
- 一、櫛ノ実ノ説
  - 一、うばゆり之説
- 一、北海道食物
  - 一、餅ノ消化試験
  - 一、鉾山衛生
- 一、東京医科大学第一医院ノ患者ニ与フル粥汁ノ分析
- 一、厨用魚貝調査成績
- 一、墓壙中ノ土分析
- 一、阿異殺菌力ノ試験
- 一、家屋衛生
  - 一、菓子之説

一、血清ノ殺菌性ハ一ノ生活現象ナルカ或ハ純粹ナル化学的現象ナルカ

(血清ノム(よう) 微生物殺滅性蛋白質ノ性状ニ就テノ研究) 坪井、エンメリヒ、スタインメッツ

一、血液ノ防禦性並ニ治療性物質

一、亜細亞虎列刺、虎列刺菌ニ原因スル亜硝酸化合物中毒

一、血清ノム微生物殺滅作用ノ増進及ビ再生ニ就テ

一、腸ヨリスル窒素排泄ニ就テ

一、ミュンヘンニ於ケル二三建築物ノ天然換氣ノ調査

一、丹毒血清ニヨル脾脱疽ノ治療並ニ癌腫其他ノ悪性新生物及ヒ又狼瘡結核馬病梅毒ノ原因的療法ニ就テノ立案エメリヒ、モストシヨール、坪井

一、丹毒球状菌毒性保存法

一、微生物培養基ノ製造法ニ就テ

一、丹毒菌及ヒ虎列刺菌ノ貯藏法ニ就テ坪井辻谷

一、足尾銅山鉱毒ニ就テ

表1 坪井次郎著書、訳書

- 坪井次郎：『普通衛生学』普通衛生雜誌社、明治三四年八月  
 坪井次郎：『新編生理教科書』金港堂、明治三〇年九月  
 プラウスマニツ著、坪井次郎訳補：『衛生綱領』卷一—四（合本二冊）  
 藤郷斌（一、二卷、島村利助）、明治三〇—三五年  
 坪井次郎：『新編中学生生理書』金港堂、明治三一年—二月  
 坪井次郎：『学校衛生学』金港堂、明治三二年六月  
 坪井次郎：『微菌学新書』（七）、南江堂、明治三二年七月  
 坪井次郎：『ベスト病実習』村上勘兵衛書店、京都、明治三三年六月  
 坪井次郎著、遠山椿吉補：『中学生理教科書』金港堂、明治三四年一月  
 坪井次郎著、遠山椿吉補：『近世衛生学』金原書店、明治四四年九月  
 坪井次郎：『普通衛生学』（上、下）、島村利助ほか、刊行年不詳  
 一〇編、一二冊

表2 坪井次郎のドイツ留学前の学会発表、講演、公開講義

- 明治二〇年（一八八七）  
 五月二〇日 「蛸のプトメイン実験説」集談会  
 五月二四日 「食物試験報告一斑」東京医学会例会  
 六月二日 「微菌染色法」国政医学会例会  
 六月二八日 「食物調査第二報告」東京医学会例会  
 九月一日 「味噌の説」東京医学会総会  
 九月二七日 「脚気と家屋の關係」東京医学会例会談話会  
 九月二八日 「牛乳試験法」国政医学会例会  
 二月二四日 「大学構内下水実験成績」東京医学会例会談話会  
 三月三日 「未詳」足利衛生会  
 三月四日 「檀の実」東京医学会例会  
 四月二五日 「『テタヌス』の説」東京医学会例会  
 五月二三日 「餅の消化試験」東京医学会例会  
 六月二五日 「未詳」順天堂医事研究会  
 六月二七日 「粥汁の分析」東京医学会例会  
 一月一六日 「未詳」順天堂医事研究会  
 一月三〇日 「日本菓子の説」大日本私立衛生会例会  
 二月二〇日 「塵埃吸引病」国政医学会  
 三月一日 「腺の説」順天堂医事研究会  
 三月二日 「家屋衛生」第一回日本医学会  
 四月二〇日 「菓子の説」東京医学会例会
- 明治二三年（一八九〇）

表3 坪井次郎の京都帝国大学時代の講演、公開講義

明治三二年 (一八九九)	一月二十四日 (ベストに就て)	京都府教育会主催 ベストに関する談話会
?	?	「細菌学講義」会場不明 (『公衆衛生』一号より)
明治三三年 (一九〇〇)	四月二十四日	「飲食物取締法に就て」 京都府医学会総会
明治三四年 (一九〇一)	四月十九日	「『バクテリオリジーン』及『ヘモリジーン』に就て」 京都府医学会総会
	五月二日	「細菌学的可検材料の採取と運搬の方法一般」 京都衛生検査所開所式
	五月二日	「ベッテンコーフェル先生の伝記と逸事」 ベッテンコーフェル追悼祭
	六月九日	「ベッテンコーフェル先生の伝」 京都府衛生会総会
	?	「伝染病予防の方針」 京都府衛生会天田郡支部総会
明治三五年 (一九〇二)	四月二六日	「都会民衆の衛生」 京都府衛生会総会
	五月一七日	(発酵酵素に就て) 京都医事会
	七月一六日	「コレラ予防談」 京都府衛生会主催 コレラ予防に関する談話会
	一〇月二三日	「細菌図譜に就て」 京都医事会
	十二月二日	「脾脱痘菌、鶏虎列拉菌、豚丹毒菌に就て」 京都医事会
明治三六年 (一九〇三)	二月二日	(ベスト及虎列拉の予防に就て) 京都衛生組合幹事会

## 十、坪井次郎の生涯をふりかえって

次郎死去後の追悼記事で、『京都医事衛生誌』は次のように述べた。<sup>(111)</sup>

「氏は随分不運の方で二十三年まで東京大学の助教授で同年夏洋行し三年間の所を一年延期願をして四年留学し二十七年十二月三十日帰朝し間もなく博士と為ったが、場所が無いと云うので三十三年京府(ママ)医科大学長にするまでは依然として助教授年俸六百円か七百円の地位であった、やっと教授学長と云う地位になり足掛け四年目の今日はや白玉楼中の人となった」

しかし一方で同誌は、次のような内国勸業博覧会関係者の言を引用しながら、名利を求めず華奢を好まず外見を意に介せず、外貌風采甚だ揚がらないが頭脳明晰で誠実高潔な、次郎の実像をも正確に記載している。この関係者によれば「坪井氏は審査に当たって其着眼点他の諸氏と異なり之れを品評するや極めて明確にして而かも極めて迅速なり実に坪井氏のコップ(頭即ち腦力(ママ)の意)は特別にして遠く他の及ばざる所なり」であった。

この世俗的な批評はさておき、坪井次郎の学者としての経歴を、四期に分けて考えることが出来る。大学卒業後ドイツ留学まで、ドイツ留学中、帰国後京都帝国大学建築設計委員となるまで、その後死去に至るまでである。

このうち、前の二つの時期は、次郎が衛生学者として自立する期間であった。帰国後、京都帝国大学の創設に携わるまでは、次郎が新進の衛生学者として、社会活動に専念した時期である。京都帝国大学建築設計委員となつてからは、次郎は同大学医科大学の創設と初期の運営に全力を注いだ。

研究者としての次郎の業績をどう評価するかは著者には資格がないが、故西川瀆八教授は「塵埃吸引病」に<sup>(91)</sup>また島蘭順雄教授は次郎の栄養学上の実験に注目している。<sup>(92)</sup>しかしそれらの業績は、先駆的な意味をもつもの、それ自身完結した研究とは言い得ないのではなからうか。

一人の研究者として見る時、坪井次郎は、自分の学的体系を確立するには至らなかったと言えるであろう。これは次郎の早世によるもので、次郎は研究室の主宰者として業績を上げ、後継者を養成する時間をもたなかった。もし次郎が長生したならば、医科大学長の職務も他の教授と交代し、多忙な管理職から離れて研究生活に専念することが出来たであろう。それまでの次郎の業績、経歴、人間性から見て、その時には恐らく大きな成果を上げたであろうと想像される。

また次郎の生きた時代は日本衛生学の創始期で、ようやく日本独自の衛生学が確立しようとしている時期であった。しかもドイツ医学の影響によって衛生学と細菌学との境界が不明確なまま、創始期の日本衛生学は、当時の細菌学のめざましい発展の影響を大きく受けた。これは、京都帝国大学衛生学教室の次郎の職をついだ松下禎二が、細菌学の研究に専念し、後に微生物学教室を創設したことから理解されよう。京都大学衛生学教室では、戸田正三が始めて衛生学本来の研究を中心とするようになり、今日の隆盛を見たが、坪井次郎はその前の、いわば未分化の時期に学者としての生涯を送ったのである。前に述べたように留学前の学会発表、講演の内容を見ると、次郎は本来の衛生学の研究により大きな関心があったのではないかと思われるが、その後の研究では細菌学が大きな比重を占めている。それは次郎の生きた時代と、置かれた個人的状況によるものであろう。

このことは、マックス・フォン・ペッテンコーフェルの業績をどのように評価するかという問題にも関連している。ペッテンコーフェルは、ローベルト・コッホに対立した面と実験衛生学の創始者との二つの面を持ったが、従来はしばしば前者が強く意識された。

産業革命によって成立した初期の近代都市は、著しく不良な衛生環境を生じた。病気を人間の集団の受ける害毒として考える時、このような条件を考慮せずには理解出来なかつた筈である。ペッテンコーフェルが伝染病の成立に多元的要因を考えたことは正しく、コッホとペッテンコーフェルの対立は、本来次元の異なる問題であった。<sup>(三三)</sup>ペッテンコーフェルの誤りは、集団的要因に目が向くあまり、基礎にある生物学的現象の重要性を否定したことにある。あるいは、ペッテンコ

「フエルの同僚で友人であった生理学者フォイトの言うように「ペッテンコーフェルが医学の実地臨床に関心も適性も持たなかった」<sup>(三六)</sup>」ことに関連するかも知れない。また化学の師であったリービッチはパスツールに対立した学者であり、<sup>(三七)</sup>その思想的影響も考えられよう。

しかしペッテンコーフェルは、コレラの生物学的原因については誤りをおかしたが、伝染病の発生・伝搬の要因を正しく指摘し、ミュンヘン市のチフス患者を激減させることが出来た。<sup>(三八)</sup>ミュンヘン市民がペッテンコーフェルの功績をたたえたのは当然である。このように細菌学を基礎としても、それと別の次元で病気をとらえ、その対策に科学的根拠を与えることに衛生学本来の使命があった。ペッテンコーフェルはそれに貢献し、実験衛生学の創始者となったのである。

坪井次郎は、ペッテンコーフェルの研究室に留学した時、すでにペッテンコーフェルが高齢であったことと、細菌学的研究を担当していたニンメリッヒを直接の指導者としたため、ペッテンコーフェルの思想のもっとも革新的な面での業績を上げることが出来なかった。また留学から帰国後は研究に専念する時間をもたず、ペッテンコーフェルから受け継いだ学問的伝統を発展させることが出来なかった。

このような意味で学者としての坪井次郎は未完のままに終わったが、日本衛生学の創成の時期に活発な研究を行い、また新進の衛生学者として社会へ貢献したことは、もっと評価されてよいのではなからうか。

## 謝 辞

この研究に援助を与えられた斎藤祥男教授、山形大学教養部・松野良寅教授、金沢大学衛生学教室・橋本和夫教授、順天堂大学医史学研究室・酒井シヅ教授、福井県立短期大学・畑野健一名誉教授、京都大学衛生学教室、東京大学衛生学教室、金沢大学図書館医学分館、大阪大学図書館中之島分館、京都府立医科大学図書館、京都府立総合資料館、国立公文書館、日本新薬株式会社、京都大学図書館医学分館、福井県立図書館に深謝する。

(この論文の要旨は、平成元年五月、第九〇回日本医史学会総会において発表した)

坪井次郎略年譜(一八六二—一九〇三)

文久二年(一八六二) 七月五日 江戸芝浜松町に出生

明治六年(一八七三) 訓蒙学社(神田神保町)に学ぶ

明治八年(一八七五) 二月一〇日 外国語学校入学

明治一〇年(一八七七) 三月 東京大学医学部予科入学

明治一八年(一八八五) 四月 東京大学医学部卒業(認定)

五月一六日 大学御用係(准助教授)

一〇月三〇日 医学士

明治一九年(一八八六) 三月二日 大学助手(衛生学教室勤務)

明治二〇年(一八八七) 二月四日 助教授

明治二二年(一八八九) 九月二四日 海軍軍医学校教授

明治二三年(一八九〇) 四月二日 第一回日本医学会で「家屋衛生」の題で講演

八月二〇日 足尾銅山出張

九月一四日 ドイツ留学に出発

明治二三年一月—二七年夏学期 ルートウイッヒ・マキシミアン大学(ミュンヘン大学)医学部衛生学教室に留学

明治二四年(一八九一) 四月一日—三〇日 モアビット病院でコッホ指導の下に結核治療法研修

明治二五年(一八九二) 八月二〇日— 第七回万国衛生およびデモグラフィイ会議(ロンドン)出席

一〇月七日 ペッテンコーフェル、コレラ菌飲用実験

二月二日 ペッテンコーフェルの講演を聴講

明治二六年(一八九三) 八月三〇日 留学一年間延期承認

九月九(一?)日 非職を命じられる

明治二七年(一八九四) 三月二九日— 第一回万国医学会(ローマ)出席



九月一日―第八回万国衛生およびデモグラフィイ會議(ブタペスト)出席

二月三〇日 帰国

明治二八年(一八九五)

一月二六日(一四?)日 医科大学講師囑託

四月二九日 臨時陸軍検査會議商議員

四月三〇日 助教授復職

二月二八日 医学博士

明治三〇年(一九八七)

三月二六日 足尾銅山鉍毒調査委員

二月二七日 足尾銅山鉍毒調査委員を免じられる

明治三二年(一九八九)

二月一六日―台湾出張

四月三〇日 京都帝国大学医科大学建築設計委員

明治三三年(一九九〇)

七月六日 京都帝国大学教授。衛生学第一講座担任

七月六日 京都帝国大学医科大学長

明治三三年(一九〇〇)

一月 京都市衛生顧問

一月二日 京都市ペスト予防會議調査委員

一月二二日―ペスト病実習講師

五月二八日 京都府検査委員部顧問

明治三四年(一九〇一)

四月二日 京都医学会総会会頭

五月二日 ペッテンコーフェル追悼祭出席、追悼演説

五月二日 京都衛生検査所微生物学的検査顧問

明治三六年(一九〇三)

二月九日 京都府衛生顧問

七月七日 医科大学病院入院

七月二日 危篤となり退院。帰宅

七月二日 午前一時、京都市西洞院通り丸太町上るの自宅で死去。享年四一

七月二日 京都市相国寺心華院で葬儀

文 献

- 「……記事」としたのは、著者による仮題。年譜上の日時に関する史料は省略した」
- (一) 泉 彪之助「医師坪井芳治の家系と経歴」『日本医史学雑誌』三五卷一号、五九一七二頁、一九八九（平成元年）
  - (二) 「坪井次郎年譜」『京都医事衛生誌』一一二号、二九一三二頁、一九〇三（明治三十六年）
  - (三) 青木一郎「坪井信道の生涯」、杏林温故会、大阪市、一九七一（昭和四十六年）
  - (四) 青木一郎「坪井信道詩文及書簡集」、岐阜県医師会、一九七五（昭和五十年）
  - (五) 「坪井芳洲履歴書」明治十六年五月 斎藤祥男教授の好意による
  - (六) 「坪井為春先生伝」『東医新誌』四三三三三、三七一三八頁、四三四四号、二九一三〇頁、一八八六（明治十九年）
  - (七) 仲田一信「埼玉県医学校と日習堂蘭学塾」、浦和市尾間木史跡保存会、一九七一（昭和四十六年）
  - (八) 松野良寅「東北の長崎―米沢洋学の系譜―」、松野良寅刊、米沢市、一九八八（昭和六十二年）
  - (九) 青木一郎「坪井為春」、日蘭学会編『洋学史事典』四六二頁、雄松堂出版、東京、一九八四（昭和五十九年）
  - (一〇) 斎藤祥男「蘭医家坪井の系譜と芳治」、東京布井出版、一九八八（昭和六十二年）
  - (一一) 泉 彪之助「坪井芳洲と薩摩藩」平成三年 第九二回日本医史学会発表
  - (一二) 「坪井次郎葬儀および追悼記事」『京都医事衛生誌』一一二号、二五―二九頁、一一三三号、一九一二二頁、一一四号、一七頁、一九〇三（明治三十六年）
  - (一三) 「坪井次郎追悼記事」『中外医事新報』五六一号、一〇六四―一〇六六頁、一九〇三（明治三十六年）、『国家医学会雑誌』一九六号、六〇四―六〇七頁、一九〇三（明治三十六年）
  - (一四) 『東京大学百年史 通史一』、東京大学出版会、一九八四（昭和五十九年）
  - (一五) 安藤彦太郎「中国語と近代日本」一〇―一二頁、岩波新書、一九八八（昭和六十三年）
  - (一六) 『東京大学医学部百年史』、東京大学出版会、一九六七（昭和四十二年）（三五六頁「衛生学教室」）
  - (一七) 『東京大学医学部一覽』、明治十年、十三・十四年、十四・十五年、十五・十六年、十六・十七年 国立公文書館所蔵
  - (一八) 『新聞集成（明治編年史） 第八卷 明治十八年十一月』、斎藤祥男教授の好意による
  - (一九) 緒方正規「坪井次郎弔辞」『京都医事衛生誌』一一二号、二六頁、一九〇三（明治三十六年）、『東医新誌』一三一九、一三三三〇―一三三三二頁、一九〇三（明治三十六年）

- (一〇) 岡田靖雄・私信
- (一一) 緒方正規「東京医科大学ニ於ケル衛生細菌学科」『東京医学会創立二五周年祝賀論文集第一集』一一三—一二二頁、一九二二(明治四十五年)
- (一二) 緒方正規「緒方正規略歴」『衛生学伝染病雑誌』一五卷二号、二三—三三頁、一九一九(大正八年)
- (一三) 『東京大学百年史 部局史二』五五頁「衛生学教室」、東京大学出版会、一九八七(昭和六十二年)
- (一四) 「座談会：衛生学の黎明を語る」『日本医事新報』一九五六号、二九—五一頁、一九六一(昭和三十六年)
- (一五) 「衛生学教室參觀記事」『東医新誌』五三二号、八九—一一九四頁、一八八八(明治二十一年)
- (一六) 佐々木秀一「日本衛生学会創立当時を語る」『日本医事新報』一九五六号、五一—五四頁、一九六一(昭和三十六年)
- (一七) 藤原元典、渡辺 敏『総合衛生公衆衛生学』、南江堂、東京、一九八五(昭和六十年)
- (一八) 坪井次郎「家屋衛生」『日本医学会誌 第一回』四三—五一頁、一九九〇(明治二十三年)
- (一九) 「大日本医学会記事」『中外医事新報』二四一号、三九七—三九八頁、一九九〇(明治二十三年)
- (二〇) 「坪井次郎渡航記事」『中外医事新報』二五二号、四九—五〇頁、一九九〇(明治二十三年)、『東医新誌』六五一号、一三五〇頁、一九九〇(明治二十三年)
- (二一) 石黒忠恵『懐旧七十年』、岩波文庫、一九八三(昭和五十八年)
- (二二) 「海外留学生表、明治二十五年三月末調」文部省大臣官房文書課、国立公文書館内閣文庫所蔵
- (二三) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤(下)』、岩波書店、東京、一九七七(昭和五十二年)
- (二四) 「坪井次郎帰朝記事」『東医新誌』八七五号、六〇頁、一八九五(明治二十八年)
- (二五) ジャン・デ・カール、三保元訳『狂王ルトヴィヒ』、中央公論社、一九九〇(平成二年)
- (二六) Harald Dreyer: Max von Pettenkofer, S. Hirzel Verlag, Leipzig, 1985
- (二七) 緒方正規「故博士マックス、フラン、ペッテンコーフェル先生逸事」『国家医学会雑誌』一九二号、二七—二八四頁、一九〇三(明治三十六年)
- (二八) 坪井次郎「ペッテンコーフェル先生ノ伝記ト逸事」『京都医事衛生誌』八八号、二五—二八頁、一九〇一(明治三十四年)
- (二九) 森下 薫「ミュンヘン大学衛生学教室」『ある医学史の周辺』三〇三—三三三頁、日本新薬、京都、一九七二(昭和四十七年)、同社の好意による

- (四〇) 北 博正「ペッテンコーフェルの再発見」『日衛誌』一三卷一号、二七—三〇頁、一九六八(昭和四十三年)
- (四一) F. H. Garrison: an introduction to the history of medicine. W. B. Saunders, 1929 橋本和夫教授の好意による
- (四二) 坪井次郎「結核病治療法に関する報告(文部大臣宛)」『大日本私立衛生会雑誌』九九号、六三〇—六四六頁、一八九一(明治二十四年)
- (四三) 森 鷗外「ドイツ日記」『鷗外全集』第三五卷、岩波書店、一九七五(昭和五十年)
- (四四) 藤野恒三郎『日本細菌学史』、近代出版、東京、一九八〇(昭和五十五年)
- (四五) Max von Pettenkofer: Ueber Cholera, mit Berücksichtigung der jüngsten Cholera-Epidemie in Hamburg. Münch. med. Wchschr. 39 (46) : 807-817, 1892
- (四六) Aerztlicher Verein München, Münch. med. Wchschr. 39 (46) : 826-828, 1892
- (四七) 「ペッテンコーフェル演説」『東医新誌』七七四号、一六一—一六二頁、一八九三(明治二十六年)
- (四八) 「坪井次郎婦朝記事」『国家医学雑誌』九三号、四五—四七頁、一八九五(明治二十八年)、『大日本私立衛生会雑誌』一四〇号、一五六—一五七頁、一八九五(明治二十八年)、『中外医事新報』三五五号、五七—五八頁、一八九五(明治二十八年)
- (四九) Jiro Tuboi: Untersuchungen über die natürliche Ventilation in einigen Gebäude von München. Arch. f. Hygiene 17 : 665-676, 1893
- (五〇) 「坪井学土の実験報告」『東医新誌』八一九号、二八一—四頁、一八九三(明治二十六年)
- (五一) 「プレントナー」『岩波西洋人名辞典増補版』一二七五頁、岩波書店、一九八一(昭和五十六年)
- (五二) 「プレントナー」『経済学辞典第2版』一一八二頁、岩波書店、一九八四(昭和五十九年)
- (五三) 住谷一彦「歴史学派」『経済学大辞典Ⅲ』四七〇—四八八頁、東洋経済新報社、一九八〇(昭和五十五年)
- (五四) 「坪井次郎」『大日本博士録』第二卷、二五—二六頁、發展社、東京市、一九二二(大正十一年)
- (五五) 大江志乃夫「日露戦争の軍事的的研究」一六九頁、岩波書店、東京、一九八九(平成元年)
- (五六) 山本俊一『日本コロンラ史』「日清戦争時代」九六一—一〇五頁、「陸軍検疫」五八五—五九九頁、東京大学出版会、一九八二(昭和五十七年)
- (五七) 鶴見裕輔「後藤新平」第一卷、「臨時陸軍検疫部」六五七—七五一頁、勁草書房、東京、一九八五(昭和六十年)
- (五八) 「坪井次郎死亡記事」『東医新誌』第一三二六号、一二八—一二九頁、一九〇三(明治三十六年)、『国家医学雑誌』一九五

号、五四九頁、一九〇三（明治三十六年）

(五九) 小川鼎三、酒井シヅ校注『松本順自伝・長与専斎自伝』、平凡社、東京、一九八〇（昭和五十五年）

(六〇) 「日本の衛生学の黎明期と衛生学書」『第五回日本衛生学会展示目録』九一〇頁、一九八五（昭和六十年）橋本和夫教授の好意による

(六一) 森長英三郎『足尾鉍毒事件（上下）』、日本評論社、東京、一九八二（昭和五十七年）

(六二) 鹿野政直編『足尾鉍毒事件研究』、三一書房、東京、一九七四（昭和四十九年）

(六三) 坪井次郎「足尾銅山の鉍毒について」『東医会誌』二二巻二三号、一〇〇五—一〇二二頁、同二四号、一〇五三—一〇六〇頁、一八九八（明治三十一年）、『国家医学会雑誌』一四二、一四三合巻号、四一—五四頁、一八九九（明治三十二年）

(六四) 「緒方正規先生生誕百年記念座談会」『日本医事新報』一五〇七、一〇〇五—一〇二八頁、一九五三（昭和二十八年）

(六五) 『京都帝国大学史』、京都帝国大学、一九四三（昭和十八年）

(六六) 倉沢 剛『学校令の研究』、講談社、東京、一九八〇（昭和五十五年）

(六七) 『京都帝国大学一覽』、京都帝国大学、明治三二・三三年、三四・三五年、三五・三六年

(六八) 『京都大学七十年史』、京都大学創立七十周年記念事業後援会、一九六七（昭和四十二年）

(六九) 『京都の医学史』、京都府医師会医学史編纂室、一九八〇（昭和五十五年）

(七〇) 「猪子学長候補風聞記事」『京都医事衛生誌』五三三号、一四頁、一八九八（明治三十一年）

(七一) 『医学雑誌総合目録』第六版、一九八〇（昭和五十五年）

(七二) 京都大学医学部図書館・私信、および『医学雑誌総合目録』第七版、一九九〇（平成2年）

(七三) 「牛乳消毒所記事」『公衆衛生』七号、一六頁、明治三十四年、「塵芥焼却炉記事」『全国菓子品評会記事』『公衆衛生』二二三号、四〇頁、一九〇二（明治三十五年）

(七四) 「京都府衛生会第一回總會記事」『公衆衛生』一号、三三頁、一九〇〇（明治三十三年）

(七五) 「ベスト実習関連記事」『京都医事衛生誌』七四号、三〇—三二頁、一九〇〇（明治三十三年）

(七六) 「京都衛生検査所」『公衆衛生』一一号、一七一—一九頁、一九〇一（明治三十四年）、同誌 二三号、一二—一三頁、一九〇二（明治三十五年）

(七七) 「木原岩太郎記事」『中外医事新報』四九六号、一五八九頁、一九〇〇（明治三十三年）

- (七) 「ペッテンコーフェル先生の追悼祭」『京都医事衛生誌』八七号、二七一—二八頁、一九〇一（明治三十四年）
- (七五) 丸山 博「坪井次郎『ペッテンコーフェル追悼演説』『森鷗外と衛生学』、勁草書房、東京、一九八四（昭和五十九年）
- (八〇) 「京都府衛生会第三回総会記事」『公衆衛生』一二号、一〇頁、一九〇一（明治三十四年）
- (八一) 坪井次郎「ペッテンコーフェル先生の伝」『公衆衛生』一五号、一一六頁、一九〇一（明治三十四年）
- (八二) 「坪井次郎死亡記事」『京都府立 医学校校友会雑誌』三二号、六三頁、一九〇三（明治三十六年）、『衛生談話』三二号、三二頁、一九〇三（明治三十六年）
- (八三) 「坪井次郎葬儀記事」『東医新誌』一三一七号、一二五九—一二六〇頁、一九〇三（明治三十六年）、『中外医事新報』五六一—五六二頁、一〇七〇—一〇七一頁、一九〇三（明治三十六年）
- (八四) 「坪井次郎死亡広告」『京都日出新聞』一九〇三（明治三十六年）七月
- (八五) 『京都市医師会五十年史』、京都市医師会、一九四三（昭和十八年）
- (八六) 「坪井次郎戸籍謄本」明治三十六年八月十日付け 斎藤祥男教授の好意による
- (八七) 『三井事業史』本篇第二巻および第三巻上、三井文庫、東京、一九八〇（昭和五十五年）
- (八八) 『国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書目録』第二巻、第三巻、第五巻、一九七二（昭和四十七年）—一九七四（昭和四十九年）
- (八九) 坪井為春『羅篤氏医語韻府』版權書類、坪井次郎版、一八八八（明治二十一年）、斎藤祥男教授の好意による
- (九〇) 羅篤（ロート）著、坪井為春訳『羅篤氏医語韻府』、英蘭堂、一八八八（明治二十一年）九月、国立国会図書館蔵
- (九一) 西川滇八「坪井次郎」『公衆衛生』四六巻二号、一四二—一四三頁、一九八二（昭和五十七年）
- (九二) 島蘭順雄『栄養学史』一五一頁、朝倉書店、東京、一九七八（昭和五十二年） 順天堂大学酒井シツ教授の好意による
- (九三) 島蘭順雄『栄養学史』一五一頁、朝倉書店、東京、一九七八（昭和五十二年） 順天堂大学酒井シツ教授の好意による

（福井県立短期大学）

# Career and Work of Dr. Jiro Tsuboi, a Hygienist

by Hyōnosuke IZUMI

The author recorded the career and work of Dr. Jiro Tsuboi, hygienist and the first dean of the medical school, Kyoto Imperial University.

He was born in 1862 as a son of Dr. Tameharu Tsuboi, a famous medical educator. After graduation from Tokyo University Medical School, he entered the Department of Hygienics of his mother school. In 1890, he went to Germany, and studied under Dr. Max von Pettenkofer at Ludwig Maximilians University in Mnnich. He also learned tuberculin therapy for tuberculosis from Dr. Robert Koch in Berlin.

After he returned to Japan, he worked as a hygienist for various social needs, including serving as a committee member for mineral pollution at Ashio copper mine.

In 1899, he was appointed Dean of the medical school, Kyoto Imperial University. Though he exerted himself for the school, he died at the age of 41 in 1903.

His scientific contribution comprises both hygienics and bacteriology. Because of his early death, his attainment remained limited.